

加入国際学術団体に関する調査票

1 国際学術団体活動状況（内規第 11 条 活動報告）

団体名	和	太平洋学術協会
	英	Pacific Science Association (略称 PSA)
	団体 HP (URL)	http://www.pacificscience.org/ (日本学術会議が加盟していることの記載 <input checked="" type="checkbox"/> 有 ・ 無)
国際学術団体における最近のトピックについて (学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等)	<p>PSA は 1920 年に創設された、ICSU の最も古いメンバーのひとつであり、事務局は米国ハワイ州にあるビジョップ博物館に置かれている。現在は 19 の国と地域、うち南太平洋地域は実際には 11 か国からなっているので、総数では 29 の地域と国が加盟している。会の運営は、会長、副会長、事務局長、財務委員各 1 名、常務委員 4 名の計 8 名が執行理事となり、これに前会長、前大会と次大会の委員長の 3 名および 1 名の実務担当常任幹事が加わって執行理事会を形成する。執行理事の選任と執行理事会の活動のチェックにあたる評議会は、加盟国から分担金に応じて派遣される評議員が構成する。</p> <p><u>PSA の加盟国には国家規模が小さい熱帯太平洋島嶼国が多数あるため、先端的な特定分野の研究の進歩よりは、広い分野の学術を地域の環境と人々の生活の質の向上に役立てることを重視する。</u>いわゆる学際的な活動の重要性をいち早く認識し、多数の小規模国家が参画する太平洋の地域学を特色としてきた学術団体である。アジア・太平洋地域において、広領域での研究者の連携、科学力の強化、研究者・政策決定者・市民間の効果的なコミュニケーション、科学的な活動への島嶼国の積極的な参画、その結果として「太平洋学 (Science of the Pacific)」を推進する仕組みとして機能することを目標としている。</p> <p>定期的な活動として、4 年ごとに太平洋学術会議を、また、その中間年 (2 年目) に太平洋学術中間会議を開催している。近年の平均的な参加国と参加者数は、約 35 か国、500 名である。会期は 5 日間で、全領域にわたる大課題が 10 題程度設定され、それぞれに基調講演者が招かれ、またそれぞれの下に数課題のセッションが公募され、発表希望者はその中から最適のセッションに応募し、シンポジウム形式で講演する。PSA の性格上、限られた国土、資源、人口での持続的な社会システムの構築と、島嶼国で顕在化する地球環境変動の影響が中心課題になりやすい。ただし、これは、太平洋地域の特殊性を示すというよりは、今日の国際社会の関心を反映したものであり、それが太平洋地域で先鋭的に表出していると理解するべきである。</p> <p>創設 100 周年を迎える 2020 年には、第 24 回太平洋学術会議が 6 月に中国で開催される予定だったが、コロナ禍の影響で現在に至るまで延期、再延期が続いている。そこで、直近の</p>	

	<p>例として、前回の第 23 回太平洋学術会議（2016 年台湾）における大課題およびその下のセッション課題数と発表件数（カッコ内数字）を次に示す。生物多様性と自然資源(12-54)、防災および減災(6-33)、社会の人的多様性と包括的な発展(8-29)、社会のための学術(4-25)、人類の健康(5-20)、地球環境変動と地球の科学(3-20)、食料・水・エネルギー（4-18）、台頭する新技術(7-17)であり、ほかに計 158 件のポスター発表があった。</p> <p>太平洋学術会議と中間会議とで隔年開催となるが、その間の年を含めて、個々の課題を対象とする<u>委員会とワーキンググループが活動している。現在活動中のワーキンググループは、（１）海洋酸性化、（２）人間社会の動態と国際化、（３）地球環境変動、（４）人的資源とその将来、（５）生物多様性、（６）科学の啓発と教育（特に科学コミュニケーション）、（７）サンゴ礁、（８）淡水、（９）公衆衛生と医学、であり、ほかに、より頻繁な研究情報交換のため、太平洋学術会議と中間会議との間の年に開催する研究集会などの可能性を検討する委員会がおかれた。</u>これらのワーキンググループや委員会で特に近年注目されている話題は、島嶼への外来種とその DNA バーコーディング、各国の博物館収蔵物の国際共同利用、気候変動や地震津波などへの対応、地域的なジェンダーや感染症に関わる課題のほか、漁業や沿岸地域の管理といった政治的な課題もある。域内では、これらの今日的な学術活動と市民生活との距離は近く、PSA はアジア・太平洋地域において必然的に研究の実践に貢献することになる。その点で、昨今重視されている「社会実装」においても一日の長がある。</p> <p>PSA の特徴のひとつとして、加盟国には大国が存在する一方で小規模な島嶼国が多数存在する。気候変動、プラスチックデブリ、生物多様性の消失等、今日の顕在化する課題は<u>全球的に取り組まなければならないものが多く、国連の SDGs をはじめ、大国も小国も連携して問題解決に取り組む姿勢がこれまで以上に重要</u>になってくる。PSA 発足以来、これまでの確固たる信頼関係を築き上げてきた日本に対する PSA の期待、そして日本が PSA 加盟国の一員として課題に取り組み世界の平和と繁栄のために果たすべき責任はますます大きなものになっている。太平洋の小さな国々と直接的に、そして定期的に繋がり、交流、議論し、協働する国際学術団体を担当する委員会としては、本 PSA 分科会が唯一のものである。</p>
<p>当該国際学術団体の対応する分野の学術の進歩に貢献した事例</p>	<p><u>PSA の設立の趣旨はアジア太平洋地域の持続可能な発展を支える科学技術の発展に寄与することであり、対応する分野としては全学術分野が対象となる。</u>PSA は、常に「分野の枠を超えて考える」組織であり、科学に対する学際的なアプローチを推進するリーダー的存在でありたいと考えている。気候変動や生物多様性の損失など、地域や世界が直面している複</p>

	<p>雑な問題がますます深刻化している現在、PSA はこのような極めて複雑な問題に対処するための学際的な対話を促進する機関としての役割を果たしている。その一例として、<u>2007 年からは、科学界ではほとんど知られていなかった「海洋酸性化」(大気中の二酸化炭素が海洋に溶けることにより海水が酸性化する)について、大会でシンポジウムを開催し、科学的な議論の促進に貢献してきた。</u> PSA は、この問題が注目され、活発な科学研究の重要なトピックとして地図に載せるような役割を果たした。</p>
<p>政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等について</p>	<p>今日の課題の多くは世界的な関心事であり、PSA に特有の課題という訳ではない。しかし、小規模な島嶼国が多い太平洋地域でいち早く顕在化しているという事実には注目すべきである。近年世界的には、これらの多面的な課題には Future Earth (FE) 計画の包括的な推進で対応しようという潮流になっているが、PSA はアジア・太平洋地域における FE の定着と推進に貢献するべく努力している。PSA 会長は ICSU 総会やそのアジア・太平洋地域事務局の会合に積極的に出席し、また太平洋学術会議や中間会議に ICSU 会長やアジア・太平洋事務局長を基調講演者として招いている。</p> <p>一方、PSA 加盟国には小さな島嶼国が多く、加盟国の数に比べて分担金の総額は小さく、十分に研究助成金を支出することは難しい。しかし、隔年に開催する学際的な太平洋学術会議と中間会議は、加盟諸国に限らず非加盟国から、科学者に限らず NPO や若い学生の参加を広く受け入れ、みなが一堂に会して論議するフォーラムとして機能している。ここで、科学者間の研究情報交換が行われ、時には国際共同研究が生まれ、また、NPO 活動の信念を確認する市民や将来の留学先を発見する若者もいる。このような広領域の研究集会を定期的かつ大規模に開催する学術団体は非常に少なく、PSA のユニークな貢献となっている。</p> <p>これらの会議の最後には、全参加者が出席できる PSA 総会が開催され、全会一致のアピールが討議され、発表される。このアピールは、執行理事会・評議会の議決とは別のものであり、学術の世界だけに向けられるものではなく、特定の学問領域に関わるものでもない。特にアジア・太平洋地域の大きな課題が取り上げられるものの、ほかにも幅広い課題にわたって、世界の他の地域も含めて、むしろ学術活動のステークホルダーすなわち政府、経済界、NPO、市民に向けられるものである。経済規模も政治体制も異なる多様な加盟国からなる学術団体としては、学術の独立性に依拠して多方面へ等しく語りかけることを大切にしているといえよう。このように、科学界の外に向けたアピールを毎回発出することも PSA 独特の活動だといえる。2014 年のフィジーでの中間会議では、太平洋島嶼国</p>

	<p>がインターネットで結ばれ、千 km 離れた国の人々も参加できるようにセットされ、ある国の首脳は主会場宛にメッセージを寄せた。ちなみに、このネットワークは主に日本の経済援助によって構築されたものである。</p>
<p>日本人役員によるイニシアティブ事項や日本からの参加によって進展や成果があったものについて</p>	<p>最近では、執行理事会に会長（黒川 清 2003-2007 年）、事務局長（土屋 誠 2007-2016 年）、財務委員（土屋 誠 2016-現在）、常務委員（中島 功 2016-現在）が日本から選出された。また、評議会には人文系と自然系の委員 3 名が日本から派遣されている。こうした日本人委員は、社会の ICT 化、医療や学術啓発活動にインターネットを導入することを検討事項として提案し、また、東日本大震災後には防災減災および社会経済活動の復興とともに自然生態系が受けるダメージと復元力に関するセッションを提案し実施してきた。</p> <p>後者では、被災国である我が国が中心になるのは当然であるが、アジア・太平洋地域の他の国からの講演者も迎えて、高い関心を集めることができた。特に直近の第 23 回太平洋学術会議では、大会冒頭の基調講演に招かれた ICSU 会長 G. McBean 博士が、FE 計画に防災・減災を取り込んで持続的な社会実現に貢献することの重要性を強調したこともあって、我が国が提案したこれらのシンポジウムは時宜を得たものとなった。</p> <p>なお、最近の太平洋学術会議と中間会議では、日本からも基調講演者が招かれ、参加者に感銘を与えている。</p> <p><u>特筆すべきことは、1961 年以来、太平洋の海洋生物学の発展に顕著な貢献があった科学者に故畑井新喜司博士の名を冠した畑井メダル (Shinkishi Hatai Medal) を授与する国際的な顕彰事業が、我が国主導で行われていることである。</u>故畑井博士は、海洋生物学の発展のみならず、発足間もない PSA の運営基盤作りに努めた人としても知られており、この顕彰事業は加盟諸国の強い支持を受けている。第 23 回太平洋学術会議で受賞者数は 14 名となり、うち 11 名は日本以外の国の科学者である。この顕彰事業の資金的な支援は畑井教授が生前在籍していた東北大学が担い、授賞候補者の選考を日本学術会議が担い、太平洋学術会議での PSA 総会の折に PSA 会長がメダルを授けることとなっている。国際学術団体の活動の一環として我が国が国際賞を授与する例は極めてまれであり、この顕彰事業のおかげで、PSA における日本のプレゼンスは際立っている。http://pacificscience.org/hataimedal/</p> <p>また、次の 24 回 PSC は創立 100 周年を迎える記念すべき大会となるが、元会長（黒川 清）が Keynote Speaker として招待され、登壇することが決まっている。</p>
<p>加入していることによる日</p>	<p>PSA の全学術分野にわたる活動は、日本学術会議の複合的、</p>

本学術会議、学会、日本国民への効果やメリットについて

俯瞰的な性格にマッチする。広大な太平洋に散在する多くの島嶼国をネットワークしているので、アジア・太平洋地域における文化、環境、生物等々の多様性に関する研究と情報交換の場として効率的、かつ、貴重な組織である。

2007年、沖縄で太平洋学術会議を主催したときの日本人参加者は319名であり、日本が大会を誘致した際には国内からの参加が容易になることを証明している。このときには、特に生物多様性、海洋酸性化、海面上昇などの課題を通じて地球温暖化の影響が参加者を介して国内に広く周知され、国内の関連学協会やNPOなどでの論議につながった。また、このときには、日本学術会議が事務局を担うアジア学術会議の日本大会も同時開催され、双方の開催効果を高めることもできた。

PSAでは現在、加盟国の博物館等の収集標品の相互利用などの態勢づくりも検討されている。太平洋島嶼国は概して国家規模は小さいが、民族、環境、生物の多様性への関心は昔から強く、それぞれに植物園や博物館などがある。PSA加盟国は、それらの多様な収集標品の相互利用ネットワークに参加できることになる。我が国も生物多様性国家戦略および同地域戦略で推進が図られている調査研究で大きな益を受けると同時に、アジア・太平洋地域における多様性研究への貢献を果たすことができる。

太平洋学術会議や中間会議への参加者の中には日本への留学を希望している若者も多い。日本の科学者が、自然災害や防災、海洋資源の保全涵養、社会のICT化やジェンダーの問題、公衆衛生や医療等々に関するセッションを主導したり講演したりすることは、日本への留学を希望する若者にとっては可能性発掘の貴重な機会となっており、ここで日本の受け入れ指導者や大学を決定できた留学生は少なくない。

日本の加盟はPSAの財政への大きな貢献となっており、日本からの執理事務や評議員の派遣、作業部会や研究発表の場での日本人の活動は、他の加盟諸国に良い印象を与えている。この地域には数多くの島嶼国があり、国連においてこれらの諸国から親日的な支持を得ることは極めて重要な外交戦略とされており、不断の外交的努力が傾注されている。学術的な活動であるとはいえ、PSAにおける日本のプレゼンスが顕著であることは、そのような外交努力を支援することになっているとの評価もある（外交関係者談）。

当然のことではあるが、上記のメリットの多くは、学術の性格として一般に開放されており、PSAに加盟していなければ活用できないメリットであるとは限らない。しかし、学術先進国としては、加盟したうえで利益を享受し、また複合的な利益形成に貢献することが重要である。それがまたアジア・太平洋地域における日本のプレゼンスを高めることになる。

太平洋学術会議ないし中間会議を招致すること、数多くの

	<p>太平洋島嶼国の敬意をつなぎとめることは、PSA に加盟する以外の方法では実現できないことである。多くの島嶼国が加盟しているため活動資金は決して大きくはないが、<u>これまで行ってきた PSA の活動を支え続けることは、太平洋域のみならず、未来の世界へ貢献することであり、日本は大きな信頼と財産を築き上げることになる。</u></p>
<p>その他（若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など）</p>	<p>PSA は 1999 年に Strategic plan を構築し、総会や執行理事会・評議会において常にその内容を検討し、必要な改定を施している。中でも、教育や学際的研究の推進、女性研究者の育成、FE などの国際プロジェクトや政策と関連した研究の推進などは、Strategic plan の主要テーマに位置づけられている。</p> <p>第 23 回太平洋学術会議では、社会の人的多様性と包括的な発展、社会のための学術、人類の健康、食料・水・エネルギー等のセッションで女性の活動やジェンダー問題が話題となり、我が国からの女性参加者が座長を務めたり講演することで貢献した。</p> <p>若手研究者の育成においては、PSA の活動には難しさが伴う。最も要望が多い研究資金の支援がほとんどできないのが実情である。それは、加盟国の多くが小規模国家であり、集まる加盟分担金額が小さいことによる（年間 US\$50,000.-程度）。研究費を出すことはできない代わりに、若手研究者の優れた研究発表を表彰したり、先進的な国における研究グループと密に接触できる機会を多数提供することに努めている。前記の留学先の発掘はそのような機会に行われている。</p>

2 今後の予定について（内規第 11 条 活動報告）

<p>総会、理事会の日本開催の予定について（招致等の予定も含め）</p>	<p>第 21 回太平洋学術会議（2007 年）を沖縄で開催した後、日本が大会、総会を誘致する可能性は、当分の間は高くはない。</p>
<p>日本人の役員立候補等の予定について</p>	<p>2016 年 6 月に台湾の台北市で開催された第 23 回太平洋学術会議において執行理事が改選された。その際、日本学術会議 PSA 分科会で決定した 2 名の候補者を推薦し、採択された。その結果は、前記の「日本人役員」の欄に記載した。</p> <p>また、現評議員の高齢化に対応し、次の 24 回 PSC で評議員の交代を行う予定。</p>
<p>現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動きについて</p>	<p>第 23 回太平洋学術会議および PSA 理事会・評議会が開催されたが、それ以降、コロナ禍の影響で太平洋学術会議は延期されている。また、委員会やワーキンググループの活動も、現在はコロナ禍で鈍っている。</p> <p>すでに記したように、前回の直近の会議では、文部科学省の</p>

	<p>東北マリンサイエンス拠点形成事業海洋生態系班がセッションを主宰したが、この研究班は、これを機会に台湾大学の研究グループとの共同研究計画について討議し、今後連携を強めるべく動いている。ほかにも、研究情報だけでなく研究試料の交換等について協約できた日本人研究者もあり、共同研究は継続している。</p> <p>一方、国内では、日本学術会議第 20 期以降に生じた問題が明らかになってきた。第 20 期以降、PSA に対応する分科会が縮小され、以前の全 7 部からの 20 余名による複合領域研究連絡委員会から、第二部系の委員数名による分科会となり、対象領域が極端に海洋生物学に偏った。このため、PSA の特色である複合的、俯瞰的な全体像が国内の学界に伝わりにくくなっている。我が国が PSA に加盟していることのメリットを活かすためには、この弱点を補強する必要があり、24 期・25 期ではより学際的なメンバー構成とすることとし、環境科学委員会に参加している委員、生物学分野、環境保全分野、地球環境分野、人類学分野、農芸化学分野の委員を新たに加え、水産学を専門とする委員と連携して太平洋学術協会の活動に対応する体制とした。特に 25 期では、PSA と理念を共有できる他領域から新たに 8 名の委員を加えた。今後、母体となる PSA の動向を見据え、評議員の高齢化に対応すべく評議員の交代を予定している（2022 年 6 月に開催予定であった第 24 回 PSC は、コロナの状況に鑑み、2023 年 8 月に再延期となったため交代はその PSC の会議で行われる予定）。</p>
--	--

3 国際学術団体会議開催状況（内規第 11 条 活動報告）

<p>総会・理事会・各種委員会等の状況</p>	<p>総会開催状況</p>	<p>2016 年 6 月（開催地：台湾、台北市） 2022 年 6 月開催予定（開催地：中国、汕頭市） （コロナの状況を鑑み、2023 年 8 月に再延期の予定）</p>
	<p>理事会・役員会等開催状況</p>	<p>2016 年 6 月執行部会、評議員会開催（開催地：台湾、台北市）、 2017 年 1 月執行部会開催（開催地：中国、北京）、 2018 年 4 月執行部会開催（開催地：ハワイ現地とオンライン会議の併用）、 2020 年 3 月執行部会開催（開催地：Web 会議）、 2020 年 7 月執行部会開催（開催地：Web 会議）、 2020 年 11 月執行部会開催（開催地：Web 会議）、 2021 年 2 月執行部会開催（開催地：Web 会議）、 2022 年 3 月執行部会開催（開催地：Web 会議）、 2022 年 6 月執行部会開催予定（開催地：中国、汕頭市）（コロナのため 2023 年 8 月に再延期の予定）</p>

	各種委員会 開催状況	2016年（開催地：台湾、台北市） 2022年6月開催予定（開催地：中国、汕頭市）（コロナのため 2023年8月に再延期の予定）			
	研究集会・会 議等開催状 況	2016年（開催地：台湾、台北市） 2022年6月開催予定（開催地：中国、汕頭市）（コロナのため 2023年8月に再延期の予定）			
	上記会議等への日本人の参 加・出席状況及び予定	2016年、第23回太平洋学術会議(台湾、台北市)、30人(2名： 土屋誠、谷口旭) 2017年1月、執行理事会（中国）、2人(2名：土屋誠、谷口 旭) 2018年4月、執行理事会（ハワイ）、2人(2名：土屋誠、中 島功) 2020年3月、執行理事会（Web会議）、2人(2名：土屋誠、 中島功) 2020年7月、執行理事会（Web会議）、2人(2名：土屋誠、 中島功) 2020年11月、執行理事会（Web会議）、2人(2名：土屋誠、 中島功) 2021年2月、執行理事会（Web会議）、2人(2名：土屋誠、 中島功) 2022年3月、執行理事会（Web会議）、2人(2名：土屋誠、 中島功)			
	国際学術団体における日本 人の役員等への就任状況	役職名	役職就任期 間	氏名	会員、連携会員 の別
		事務局長	2007～2016	土屋 誠	(24期) 会員・ 連携
		財務委員	2016～現在	土屋 誠	(24期) 会員・ 連携
		常務委員	2016～現在	中島 功	() 期) 会員・連携
		評議員	2003～2019	尾本 恵市	() 期) 会員・連携
		評議員	2003～2019	森澤 正昭	() 期) 会員・連携
		評議員	2003～現在	谷口 旭	(24期) 会員・ 連携
出版物	1 定期的（年4回） 主な出版物名 Pacific Science（年4回） 2 不定期 主な出版物名 Marine and Coastal Biodiversity in the Tropical Island Pacific Region				
活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載 (http://pacificscience.org/structure/)					

4 国際学術団体に関する基礎的事項（内規第3条、4条、5条）

国内委員会 (内規4条第3号)	委員会名	PSA 分科会
	委員長名	大越 和加
	当期の活動状況	(開催日時 主な審議事項等) 令和3年1月14日 ・太平洋域における学際的な研究活動の展開について意見交換を行った。 ・太平洋学術会議と当分科会の連携・協力について意見交換を行った。 ・畑井メダル顕彰事業について審議した。
内規第3 (国際学術団体の要件関係)	国際学術交流を目的とする非政府のかつ非営利的団体である ① 該当する 2. 該当しない ※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載 (http://www.pacificscience.org)	
	各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている(主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か) ① 該当する 2. 該当しない ※根拠となる資料の添付又は URL を記載 (http://pacificscience.org/)	
	下記の事項(ア～エ)のいずれか一つに該当するか(該当するものに○印) ア 個々の学術の専門分野における統一のかつ世界的な組織を有するもの イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一のかつ世界的な組織を有するもの ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの	
	10 カ国を超える各国代表会員が加入している ① 該当する 2. 該当しない	
	加入国数及び主要な各国代表会員を10記載	(29ヶ国・地域) ・各国代表会員名/国名 1. AUSTRALIA National Academies Forum 2. CHINA - BEIJING China Association for Science and Technology (Yonglong LU, Jiuyi QIN) 3. Korea The National Academy of Sciences, Republic of Korea (Sang-DaiPark)

		<p>4. FRANCE Académie des Sciences (Marie-Lise CHANIN, Jean-Yves MEYER)</p> <p>5. MALAYSIA Ministry of Science, Technology & Innovation Malaysia</p> <p>6. NEW ZEALAND Royal Society of New Zealand (Phil COWAN)</p> <p>7. PACIFIC ISLANDS (Cook Islands, Fiji, Kiribati, Marshall Islands, Nauru, Niue, Samoa, Solomon Islands, Tokelau, Tonga, Tuvalu, Vanuatu の 12 か国の連合) The University of the South Pacific (John BYTHELL, Jito VANUALAILAI)</p> <p>8. RUSSIA Russian Academy of Sciences (Valentin SERGIENKO, Alexander CHEREDNICHENKO)</p> <p>9. THAILAND National Research Council of Thailand (Tipaporn LIMPASENI, Dr. Soottiporn CHITTMITTRAPAP)</p> <p>10. UNITED STATES National Academy of Sciences (Nancy LEWIS, David SCHINDEL, Kevin JOHNSON, Curt DAEHLER, Karumuna KAIJAGE)</p>
--	--	---